

* 関 勝 則 「時代を映した横浜の歌」 探訪。

《 7 》 日本貿易博覧会で賑わう会場に流れた「港ヨコハマ花売娘」

写真:横浜市史資料室

「憧れのハワイ航路」を大ヒットさせた岡晴夫が翌年の1949(昭和24)年に発売した「港ヨコハマ花売娘」でした。岡晴夫は「港シャンソン」「港に紅い灯が点る」など港ものの曲を歌う一方、「上海の花売り娘」、「広東の花売娘」「南京の花売娘」「東京の花売娘」と戦前から戦後にかけて花売娘シリーズを歌ってきました。港ものに花売娘を加えて、五番煎じのように作られたのが「港ヨコハマ花売娘」。作詞の矢野亮はキングレコードのディレクターから作詞家に。この曲について、「東京の花売娘が大ヒットしたのでヨコハマも間違いないだろう」と語っています。作曲は岡晴夫の親友といわれた上原げんと。この曲まですべての花売娘シリーズを作曲しています。



当時の横浜は世界に向けて民間貿易を再開。野毛山と反町を会場として日本貿易博覧会が開催され、3か月間で360万人もの入場者を記録しました。動物を展示した野毛山は2年後に野毛山遊園地となり、後に野毛山動物園となりました。

また当時、同じ野毛山の老松国民学校に間借りしていた横浜

「赤いテールが にじんでとけて 消えてバンドへ ゆく石だ たみ 海のかおりを 夜風が運ぶ 花を召しませ 召しませ 花を いとしあの娘は ああ 港ヨコハマ 花売娘」…。歌詞にある「バンド」は「Band」。当時埠頭、波止場をそう呼んでいましたし、今はなきバンドホテルの名称の由来でもある「海岸通り」を意味する言葉でもあります。この歌詞の中でどちらを意味しているのか不明ですが、当時の人は理解できていたのでしょうか。終戦の荒廃した街を明るく歌声で包んだ「東京の花売娘」や「港ヨコハマ花売娘」、当時、花売り娘が横浜に存在したのか。そのことについて作詞の矢野亮は、「当時はいなかった」とはつきり答え、実在しない花売り娘に夢とロマンを託したというようです。ただし、歌が流行ったため東京の銀座に、花売り娘が登場したという説もあり、横浜にも1951(昭和25)年以降には、米兵や酔い客を相手に花売り娘が存在したともいわれています。ちなみに、この曲の作曲者である上原げんとはこの1年後に岡晴夫の「長崎の花売娘」、2年後に美空ひばりに「ひばりの花売娘」を作曲。花売娘シリーズを継続する一方、後に「港町十三番地」や「ひばりのマドロスさん」など、横浜の歌を数多く手がけています。

質問 現有機との性能の違いは。 消防局長 エンジン出力が2倍以上となり、2基あるエンジンのひとつが停止しても継続して飛行できるため安全性が向上する。また、搭載重量も2倍以上の2800kgあるので、長時間飛行(北方・函館、西方・大分)や多数の人員輸送が可能となる。 質問 今回の運用開始にあたって。 副市長 今回の導入に至るまで、東日本大震災や全国で発生した災害での活動例を踏まえて検証を重ねてきた。今回の新型ヘリの運用開始で、横浜の災害対応能力や防災の強化が図られ、市民の安全・安心に寄与できるものと考えられる。 その後、消防ヘリは他都市からの災害援助要請に応え、山火事や登山者の救助等に実績を上げています。昨今の豪雨災害の現場を見ても明らかのように、被災者を地上から救出することは極めて困難であり、上空からの救助活動が頻繁に報道されています。現在、神奈川県内で消防ヘリを所有しているのは横浜と川崎の2市であり、今後も様々な要請が横浜消防に寄せられることと思います。災害時にその能力を発揮し人命救助等に当たる高性能ヘリコプターの運用は、市政運営における重要事業です。

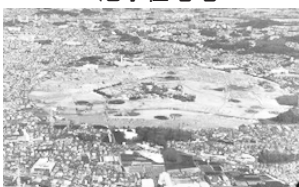
平成30年1月26日、金沢区にある横浜ヘリポートから消防局所有のヘリコプターに搭乗し、上空から市内の米軍施設を視察しました。基地対策特別委員会による市内視察の一環で、昨年は議会所有のバスで米軍施設の敷地内を視察しています。上空から見ることで施設規模の大きさを一層実感することができます。 視察ルートは、池子住宅→旧深谷通信所→旧上瀬谷通信施設→鶴見貯油施設→横浜ノースドッグ→根岸住宅→旧富岡倉庫→旧小柴貯油施設で所要時間30分ほどの行程でした。あらためて、今後も接収解除に向けた働きかけを継続していくことはもちろんのこと、返還された施設跡地についても市民解放を含めた利活用迅速に取り組む必要があることを強く感じました。 さて、今回搭乗した消防ヘリですが、横浜市消防局としては3代目の機種で、平成25年に1号機を、平成27年に2号機を導入。当時のヘリ更新については、私が予算特別委員会での経緯や必要性を副市長や消防局長に質しています。



横浜消防ヘリ



池子住宅地



旧深谷通信所



基地対策特別委員会 市内視察